

行者の出現と遊行遍歴による伝播の総合的研究

<研究目的>

本研究は、日本における行者とよばれる宗教者の活動やそれに対する信仰について、文学・歴史学・仏教学の視点から検討し、その社会的・宗教的役割や影響について総合的に考察するものである。ここで言う行者とは、仏道修行に専心し、験力を得るなどの特別な存在として信仰された宗教者のことであり、類似の存在である聖や験者なども検討対象に含める。

行者に関しては各分野において先行研究が積み重ねられている。しかし、多方面に対し多くの影響を与えたことは想定できるが、歴史史料に記述が少なく、その一方で関連する言説や伝承が多い行者を総合的に理解するためには学際的な研究が求められる。

本研究では、特に日本中世の史資料の分析を中心として、行者の活動、行者への信仰、行者の描かれ方、そしてそれらが与えた後世への影響を、文学・歴史学・仏教学研究により分析する。その上で、インドにおける行者のあり方と比較検討をする。そのことで、前近代の日本における行者の社会的・宗教的役割を汎仏教史的視野のもとに提示することを目指す。

日本には古代から、行者とよばれる仏道修行に専念し特別な存在として信仰された宗教者がいる。その代表例は、奈良時代に葛城山を中心に活動し、後に修験道の祖とされた役小角であると考えられるが、同じく奈良時代に私度僧として民衆に教化し諸国を遊行したとも伝えられる行基、平安時代に念仏聖として諸国を行脚したと伝えられる空也、遁世僧として各地を遍歴し修行し多くの歌を残した西行なども、その範疇に含まれるだろう。

日本の文学・歴史学・宗教学において、このような行者が重要な存在であることは論を俟たない。東大寺などの大寺院に所属するのではなく、民間への布教など独自の宗教活動を行うことで、権威化され信仰対象とまでなった行者について研究をすることは、日本における仏教実践の一側面について明らかにすることにも繋がる。実際に、彼らの事跡や遺した著作だけでなく、関連する伝承に至るまで広く研究がなされている。たとえば、古代における山林修行者の実態を研究した小林崇仁『日本古代の仏教者と山林修行』（勉誠社、2021年）が近年のまとまった成果であろう。

一方で、前近代には、現在では名前も知られていない多くの行者がいたことも知られている。それは念仏聖や高野聖とよばれる者たちである。それについては、五来重の研究（『高野聖』角川出版、1975年など）が古典的なものであり、宮家準などによる修験道史の研究（『修験道儀礼の研究』春秋社、1971年など）もそこに含めることもできるだろう。

また、古代史研究においては、歴史学の吉田一彦（『日本古代社会と仏教』吉川弘文館、1995年）や藤本誠（『古代国家仏教と在地社会』吉川弘文館、2016年）などにより、行者を含む民間宗教者の位置づけについての議論が進展している。一方で、中世以降についての

総合的な視点からの研究は少ない。

このように、研究の蓄積はなされているが、各分野での研究に留まるものが多い。しかし、それでは不十分であろう。たとえば、役小角は、古代・中世の説話集や寺社縁起あるいは歴史書などに多くその活動が描かれる。しかし異能の存在として描かれることが多く、その歴史的事跡は明らかではない。また、そのような存在であるが故に、その修行地とされる場所が聖跡とされるようになったり、新たな伝承を生んだりしている。そのことの意義を、たとえば文学研究の手法のみで追求することは難しい。すなわち、個別の分野の研究では、その存在の意義を全体的にとらえることは難しく、分野を横断した共同研究が必要とされる研究対象なのである。

本研究は、まず【文学・歴史文献班】と【仏教・浄土教文献班】にわけて、行者に関する史資料を分析する。また、行者に類する存在は日本以外の仏教を信仰する地域にも存在している。それらとの比較検討から、日本の行者の特徴を明らかにするために、【インド仏教文献班】を設置する。各班の成果をもとに定期的に意見交換を行い、最終的には総合的に前近代の日本における行者の社会的・宗教的役割を明らかにすることを目指す。

各班の目的は以下のとおりである。

【文学・歴史文献班】は、説話集や各地の寺社縁起、表白・願文や勸進文、あるいは寺院文書などの歴史史料における行者の描写を分析する。また、各資料の影響関係について検討する。そのことで、それらの史資料に行者が登場する意義を明らかにする。

【仏教・浄土教文献班】は、日本で重視された経典や聖教における行者の位置づけを分析する。また、主に浄土教を広めた念仏聖の遊行遍歴やそれが与えた影響について、具体的に明らかにする。

【インド仏教文献班】は、インド仏教における神変説話を分析する。日本の行者に関する伝承には神通力や験力についての話が多く含まれることを鑑みて、特にインド部派仏教の説一切有部の人々が経典に見られる神変説話をどのように理解していたのか明らかにする。

本研究の独創的な点は、汎仏教史的視野のもとで日本の行者の意義を明らかにすることである。行者に類する存在は、仏教を信仰する各地域に存在するため、日本でのみ検討していても、その特徴を明らかにすることはできない。本研究ではインドとの比較を行うが、いずれは東アジアとの比較検討も行いたいと考えている。そのような、汎仏教史的視野のもとでの研究の具体的実践例として、今後の研究のモデルになると考えられる。

日本仏教の特徴を考える際に、行者の研究は欠くことはできない。しかし、その活動を理解することは容易ではなく、学際的な研究が必要とされる。本研究は、多分野の研究者により、個別の史資料の精緻な分析にもとづきながら議論を重ねることで、各時代に行者が出現した意義、あるいは行者が遊行遍歴したことによる思想や文化の伝播について明らかにし、

それを踏まえて、汎仏教史的視野のもとで前近代の日本における行者の社会的・宗教的役割を示す。その成果は、関連する学界に影響を与えるだけでなく、日本仏教史像を塗り替えるものになるはずである。

<研究計画>

本研究は、日本中世に作成された行者に関する史資料を主たる分析対象とする。具体的な研究の進め方としては、史資料の内容にあわせて班をわけ、【文学・歴史文献班】と【仏教・浄土教文献班】である。それぞれの視点から、行者について分析する。また、日本の行者を相対化するために、【インド仏教文献班】を設置する。各班の分析の成果をもとに全体での議論を重ね、総合的に前近代の日本における行者の活動やその影響を検討する。すなわち、あくまで史資料の分析に基づきながら多分野の研究者で議論をして、汎仏教史的視点をを用いた研究を実践するのである。

プロジェクト全体の基盤となるのは、各班の活動である。その研究計画は以下のとおりである。なお、本研究では史資料の原本調査を実施するが、活字化されたものだけで研究を遂行することも可能である。そのため、感染症拡大など不測の事態が起こっても、臨機応変に対応できる。

【文学・歴史文献班】担当：坪井・三好

『日本霊異記』などの説話集や各地の寺社縁起、表白・願文や勧進文、あるいは歴史書や寺院文書などの歴史史料の内容を分析する。三好が文学研究の立場から、坪井が歴史学研究の立場から分析を行う。文学と歴史学を同じ班としたのは、歴史書や寺社縁起の分析には、両方の専門知識が必要となるからである。そのため、両者で同じ史資料の検討を行う。まずは説話や寺社縁起を中心として行者が登場する史資料をリスト化し、その描かれ方を分析する。

【仏教・浄土教文献班】担当：齋藤・南

日本で重視された経典や聖教における行者の位置づけを分析する。また、日本に特徴的な行者として念仏聖がいるが、それもこの班の担当とする。具体的には、法然周辺の念仏聖の活動による思想の伝播について検討する。なお、『法然上人行状絵図』13巻1段「聖護院静恵、上人に帰依・往生」を出発点として法然教団と修験とのネットワークについて検討する予定もある。経典等の分析の担当を南、念仏聖の検討の担当を齋藤とするが、両者で協力して実施する。

【インド仏教文献班】担当：田中

インド仏教における神変説話を検討する。特に、日本の行者に関する説話と比較検討するために、行者についての議論やそれに関する説話を取りあげて分析する。特に説一切有部の論蔵や禅経に登場する神通力の定義、獲得方法、利用方法について整理を行い、インド部派仏教の説一切有部の人々が経典に見られる神変説話をどのように理解していたのか明らかにする。